

河内大塚山古墳（かわちおおつかやまこふん）

河内大塚山古墳は、西大塚の東^{ひがしよけがわ}除川西側に発達した、中位段丘面に築かれている。周濠を持つ巨大^{ぜんぼうこうえんふん}前方後円墳である。墳丘規模は全長335m、前方部幅230m、後円部直径185m、前方部高4m、後円部高さ20mをはかる。前方部はほぼ北面する。人工の造山だが、後円部頂上は海拔45mに及び、松原市内で最も標高が高い。

墳丘主軸長では、日本列島第5位のトップクラスだが、築造時期を決める資料に乏しい。しかし、①前方部は平板低平で、やや不整形をとること。②埴輪^{はにわ}や葺石^{ふきいし}の存在がはっきりしないこと。③後円部に「ごぼ石」とよぶ巨石が存在するうえ、江戸時代後半の毛利家文書の「阿保親王事取集^{あほしんのうことりしゅう}」（山口県立文書館蔵）に「磨戸石^{みがきどいし}」とよぶ巨石が18世紀後半の宝曆^{ほうり}～明和年間に見られたこと。④古墳内にあった石室材・石棺材と思われる竜山石^{たつやまいし}や花崗岩^{かこうがん}が柴籬神社^{しばがき}（松原市上田7丁目）などへ移されていること。

このようなことから、横穴式石室が後円部につくられていた可能性があり、6世紀中葉から後葉の古墳と考えられる。

中世には、丹下^{たんげ}氏が古墳を利用して、丹下城を築いた。織田^{おだ}信長^{のぶなが}によって丹下城がこわされた後、江戸時代には前方部に大塚村が形成され、後円部には氏神の天満宮（菅原神社）が祀られた。

大正10年3月に国の史跡（昭和16年12月解除）となり、大正14年9月に^{りょうぼ}陵墓参考^{きんこう}地となったことから、平成3年までに数十戸の民家は濠外に立ち退いた。

6世紀代の安閑^{あんかん}天皇や、欽明^{きんめい}天皇陵とする説があると同時に、墳丘未完成説も唱えられている。現在、宮内庁が管理する陵墓参考地である。